ISSN 0913-3321

盲人のための
国際シンボルマーク

愛の光通信

No. 2 1987年7月

東京ヘレン・ケラー協会
海外盲人援護事業事務局

「見える！」

生まれて初めて弱視レンズを使って……

ネパール・カトマンズのラボラトリー・ハイスクールで

ネパールへの道、岩村昇・史子ご夫妻の朗読奉仕

―― パントさんの来日に想う ――

社会福祉法人　日本点字図書館長　本間　一夫

日本の盲人社会にも、ようやく余裕ができてきたと見てよいのだろうか。我が国に比べはるかに遅れているアジアの開発途上国の盲人の幸せにも目が向けられることが多くなってきた。大阪府立盲学校の職員たちが中心となって、点字盤を全国から集め、マニラの盲学校に寄贈した、などもその一例であるが、最も大規模なものは東京ヘレン・ケラー協会のネパール援助であろう。日本の盲人文化は、欧米に比べればまだまだである。しかし、アジア、アフリカなどの開発途上国に比べれば、日本ははるかに進んでいる。だからこのような先駆的な計画は大変好ましいことである。

ヘレン・ケラー協会は、60年12月と62年3月と二度にわたってネパールに調査団を送り、かの地の盲教育の実情を詳細に調査し、その報告はわれわれに少なからぬ刺激と反省とを与えた。むろんネパールにも何校か盲学校はある。しかしそこに絶対必要な点字の教科書がほとんどないというのだ。そこで協会は、かなり高額の日本製の点字出版機材一式をまず寄贈し、現地で教科書作りをさせようと計画した。ところが、そのためには当然技術者をも養成しなければならないということになった。物を贈ってよしとするのではなく、人をも養成しようという遠大な計画である。

こうして、去年の8月から3か月間招かれてやって来たのが、パニンドラ・ラジ・パント氏である。協会内での猛勉強はもちろん、関連施設へも出かけてよく勉強したと聞く。ちょうど8月下旬、東京で開かれた点字図書館専門家の国際会議にも母国の代表として参加し、「ネパールには70歳を越える者はほとんどいないから、盲老人への配慮は不要だ」などと発言し、皆を笑わせたものである。

彼の宿舎と日本点字図書館とは、ごく近い距離にあった。だから日中仕事を終わるとよく遊びに来ていた。私自身は接する機会が少なかったが、一時期は毎晩のように彼の明るい声が玄関に響いており、若い職員たちとはよくつきあっていたようだ。

言葉は英語なのだが、日点には海外研修の経験を持つ職員もかなりいるので、その点もさして問題はなかったと聞く。一緒に食事をしたり、酒を飲んだり、音楽会へ行ったり、東京ディズニーランドまで案内したり、山登りにも加わってもらったり（このあたりでは、かえって教えられたであろう）、さらには家庭まで案内して泊めてあげた職員も何人かあった。帰国が近づく頃には日本語もなかなかうまくなり、親しさは一層増したようである。それは実にほほえましい、若者たちの個人的な国際交流の姿であった。

ネパールと言えば、私ははっきり思い出すことがある。それは日点がテープライブラリーを始めて間もない昭和36年頃のことであった。あの岩村昇・史子夫妻が朗読奉仕を申し出られ、よくおみえになって応接室でいろいろお話したことである。

朗読奉仕活動の文字通り草分け時代であった。先生は『漢方医学』（大塚敬節著）を読まれ、奥様は『誤診百態』（林良材著）を手がけられた。当時先生は鳥取大学に籍をおいておられたのだが、その後間もなくネパールへ行かれたので、この奉仕は自然中断されてしまったが、あちらでの先生のご活躍を耳にするたびに、私はあのことをよく思い出したし、逆に奥様の何とも言えない暖かみにあふれた朗読のお声をうかがうごとに、あちらでの先生を助けてのお働きを想像したものである。今はバンコクの郊外で貴重なお仕事をしておられると聞くが、御成功を心から祈っている。

図書館の事業所は階下玄関脇の六畳間で、そこにはその頃購入できた約七百冊の点字図書をそろえました。価格は一冊一円から一円十銭ぐらいだったと記憶します。書棚には、幅一間ほどの六段式のものを一本五十七円で近くの指物屋にたのみ、四本ならべました。それに図書を郵便で送るための厚手の布袋を、これまた一円余で百枚ほど用意しました。他に閲覧用机一つと椅子二つ、カード類若干を取りそろえましたが、これだけが図書館創設当時のすべてであったのです。

―― ささやかな出発 ――　　本間一夫著『指と耳で読む』（岩波新書）より

本間一夫氏略歴

1915年　北海道に生まれる。五才で失明。
1939年　関西学院大学専門部英文科卒業。
1940年　私財を投じて点字図書館を開設。

ネパール王国から帰って

社会福祉法人　東京ヘレン・ケラー協会理事　　井口　淳

「あなたの国、日本では一般の人達の盲人に対する感情はどのようですか？」

これは1987年4月2日から4日にかけて、ネパール王国の首都カトマンズで開かれた、盲児教育セミナーで、参加者から最初に受けた質問でした。私は一瞬タイ王国の仏教徒が、朝出かける時盲人を見かけると、「今日は縁起が悪い」と言って、きびすを帰し家に立ち返り、一日中外出しないという話を思い出しました。仏教では因果応報といって、盲人は前世で悪いことをした報いだというのです。

ネパール王国にも仏教徒はいますが、殆どはヒンズー教徒だそうです。果たしてヒンズー教も因果応報をいうのだろうかと考えました。

「昔は日本も盲人は前世の報いであるという思想が強かったが、最近は宗教的考え方が変り、全人類の中に占める身体障害者の比率が或る程度決まっていて、盲人もその比率によって生まれてくると考えられています。従って五体健全な人でも、いつそのくじを引き当てるか分らないというのです。つまり自分の替りに誰かが盲人のくじを引いてくれたと思えば、盲人に対する思いやりや面倒をみることは美徳ではなく当然の義務だという考え方に変りつつあります。その為かボランティアも増え、盲人に対して手を貸してくれる人達がとても多くなりました。私はかつて或る新聞社の記者をしておりましたが、ちょっとした事故で失明いたしました。もう私の人生は終ったものと思い自殺を考えました。しかし多くの人達が私に手を貸して下さいましたので、これはきっと神様が私にもっと仕事を続けるように力づけて下さっているものと解釈いたしました。ボランティアの人達は神様の手であると思っています。」

参加者はいちいち大きくうなづいていたということです。後で分ったことですが、ヒンズー教もやはり因果応報的な考えを持っているそうですが、盲人を助けようとする人達も増えてきているようです。それは盲人に徳を施すことにより、自分が来世にはより恵まれるという考え方からきているようです。

我が国が太平洋戦争でアジアの国々で犯した罪は大きく、至る所にその傷跡が残っています。心の中に残った傷は最も深いものでしょう。東京ヘレン・ケラー協会が海外盲人援護事業を始めたのも人類愛だけでなく、こうした罪滅ぼしも理由の一つと言えましょう。いや、東京ヘレン・ケラー協会だけでなく、経済大国となった現在、国をあげてこうした事業に力を入れるべきではないでしょうか。私は皆様のご協力をお願いしてやみません。

ひと

盲人の強い味方として

井口淳

三十五年、目を病み、視力が衰えていった。四十八年、NHKの朝の連続ドラマを見ていたら、画面は一点の光となり、それも消えた。五十歳にして、完全に失明。

「自殺したいと思いました。子供三人、まだ結婚していなかった。父が自殺じゃ結婚のとき困るだろうと。車にはねられて死ねたらと考えたりしました」

三十六年、「エコノミスト」の編集から「点字毎日」に変わっていた。死と闘いながら信念ができた。「マスコミの経験を生かして、盲人の味方になろう」　点毎から、ヘレンケラー協会に移り、点字出版局長。月刊誌の「点字ジャーナル」に思ったことをズバリと書き、盲人の欲する本を出す。

「点字だから、膨大な量になるんですよ。コンサイス英和辞典一冊分が七十冊くらいになってしまう。家においておくにも場所をとる」　本は三百冊出ればベストセラー。注文を受けてコツコツとつくっている。

医者に眼底がまだ生きているといわれた。手術すれば、奇跡が起きるかもしれない。しかし、一人の盲人のいった言葉がひっかかっている。

「井口さん、盲人でなくなったら強い味方を失う気がする」　見えないこともいいだろうと思い返したりする。

盲人に釣りの手引きをしたり、日本盲人作家クラブをつくったり、活動は幅広い。「盲人はどこで見るか、顔で見るといわれたことがありますが、そのとおりですね。顔に神経を集めているんです」　風がいろんなことを教えてくれる。小さな当たりで「ああビルが切れたな」「せまい路地だな」とわかる。明るく、はっきりした話し口。ことしのキワニス賞受賞、この記事を見てもらえないのが残念である。五十九歳。

（四方　洋）

◀毎日新聞 1982年7月の「ひと」欄

井口淳略歴

1923年　兵庫県に生まれる。
1947年　早大政治経済学科卒業。毎日新聞大阪本社入社。
1973年　角膜損傷がもとで失明。「点字毎日」記者を経て、東京ヘレン・ケラー協会点字出版局長。
1982年　**キワニス社会公益賞受賞**を期に、海外盲人援護事業に着手、事務局長。

1986年度事業報告

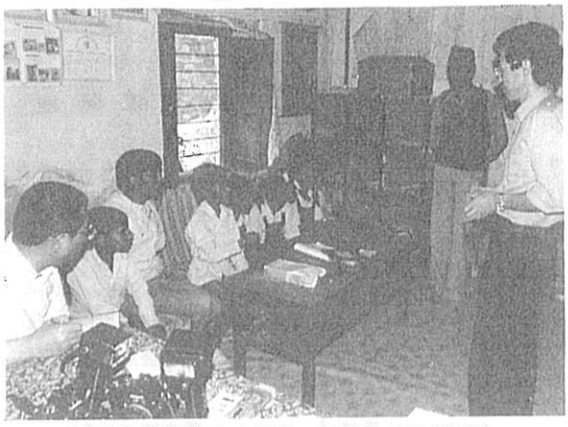
一　事業活動

1985年12月の第一次ネパール盲人福祉調査を踏まえて、今年度は、カトマンズに点字印刷所を開設する事業をスタートさせた。そのまず第一歩として、ネパール人技術者を日本で養成することとし、ネパール盲人福祉協会と協議の上、同協会の点字印刷・盲人用具開発を担当しているP.R.パント氏（29才）を日本に招いた。

氏は8月17日に来日、同21日から23日にかけて東京で開催された、ＩＦＬＡ（国際図書館連盟盲人図書館専門家会議・日本委員会委員長は本間一夫氏）へ参加し、世界各国の盲人福祉に携わる人々と交流した。又、その「発展途上国シンポジューム」では、ガーナ、スリランカの代表とともにパネラーとして活躍、国連の国際障害者年の呼びかけは、そもそも途上国に数多く放置されている障害者の問題が中心課題であったことを改めて呼び起こした。

8月25日から9月10日まで、仲村点字器製作所において、点字製版機の組立て、保守、修理の技術研修を受け、9月12日から10月29日まで、東京ヘレン・ケラー協会において、製版、印刷、製本の実習を受けた。又、その合間をぬって、所沢市の国立身体障害者リハビリテーションセンター、青梅市の盲老人ホーム聖明園、大阪市の点字毎日、日本ライトハウスなど各地の盲人関係施設を訪ねた。同時に、盲人の登山サークルに同行して登山を楽しんだり、日本ネパール協会の会合に出席するなど各方面で親睦を深め、11月8日帰国した。

ネパールへ贈呈された機材は、点字製版機一台、点字印刷機二台、亜鉛板4,000枚、点字用紙224,000枚、製本道具一式など。この点字製版機は、仲村点字器製作所の特別の研究努力によって、亜鉛板とアルミ板（ネパールでは使われる可能性がある）の両方に使えるよう調整された。又、印刷機には、ネパールの電力に合わせてメーカーでコイルを巻き直した特別仕様のモーターを装備した。



弱視児へ視力検査を行う、五十嵐・千田両先生。
ポカラのアマルシン・ハイスクールにて。

セミナーの開会式であいさつする、K.B.ビスタ文部大臣

二　広報活動

5月、（社福）日本盲人福祉委員会発行の「世界盲人連合ニュースレター」№16で、第一次ネパール盲人福祉調査について詳細報告を行った。

6月1日のＮＨＫラジオ「盲人の時間」で、「アジアの盲人と日本」のテーマの下、事務局長の井口淳が、国際盲人クラブ代表の金治憲氏と共に出演した。

6月19日、（社）日本ネパール協会の定例講演会で、第一次調査団長田中徹二氏および事務局の野崎泰志がスライドを含めた講演を行い、同会会報8月号に掲載された。

9月4日、世田谷南ロータリークラブ総会でパント氏が卓話を行った。

10月12日、ＮＨＫラジオ「盲人の時間」で、パント氏が盲人登山サークルと八ヶ岳登山をした時の模様が放送された。

10月30日、点字機材の贈呈式を小協会講堂で開催し、N.P.アルジャール駐日ネパール王国大使、川喜田二郎日本ネパール協会会長のメッセージをいただき、アジア眼科医療協力会の黒住格博士の記念講演を賜った。

11月7日、帰国に先立ち毎日新聞「ひと」欄に、パント氏のプロフィールが掲載された。

2月5日、ネパール・ユネスコ委員会事務局長でネパール文部省次席次官のR.J.タパ氏が小協会へ来訪、パント氏の研修経過を視察、合わせて3月に出発予定の第二次調査団のメンバーに感謝と激励の言葉をいただいた。

三　調査研究活動

トヨタ財団の研究助成（290万円）を受け、「ネパールにおける視覚障害児教育の方法論に関する実践的研究」を11月から開始した。広島大学助教授五十嵐信敬氏、国立特殊教育総合研究所弱視室長千田耕基氏を中心とする、日本ネパール共同研究チームにより準備され、3月から4月にかけて現地調査に入った。3月6日、先発隊の野崎泰志、佐々木秀明

京ヘレン・ケラー協会録音課長）が出発、研究プログラム、セミナーなどの事前準備を終えた後、盲教育校、父兄、学校をめぐるコミュニティーの実情などの調査を開始。後続の本隊五名の到着（3月28日）後は合流し、ネパールで盲教育を行っている全ての学校とその周辺（ダラン、ラーハン、ダンガリ、ポカラ、カトマンズ）を調査した。団員は前記の4名の他、井口淳、田中徹二、染矢朝子(通訳、日赤語学奉仕団)の合計7名であった。

これらの成果を踏まえて、4月2日から4日まで、カトマンズのトリブバン大学医学部付属教育病院で、「視覚障害児の統合教育の為のナショナルセミナー」を開催。開会式には、K.B.ビスタ文部大臣、金子一夫在ネパール大使のご出席を賜り、それぞれ祝辞をいただいた。参加者は、文部省、トリブバン大学、ネパール盲人福祉協会の関係者はもとより、全国各校の校長以下現場教師に及び、日本側8名ネパール側40名というかつてない規模で、熱気あふれる討論が続いた。この結果は、行政の責任分担から具体的なカリキュラムや教授法にいたる32項目の提言にまとめられ、最終日に採択された。これらは、今後の協力をどう進めるかについての基本的指針ともなっている。尚、日本側のメンバーとして、ネパール在住の畠博之氏（ネパール教育協力会派遣教師、元大阪府立盲学校教諭）がセミナーに特別参加され、今後も本来の教育ボランティアのかたわら、ネパールの盲教育に貢献されることになった。

四　募金活動

新しい趣意書と「愛の光通信」No.1によって募金に力を入れた。全国老人クラブ（100万円）、自動車労連（190万円）、富士記念財団（180万円）のまとまった助成金を得られ、研修、資機材の贈呈を順調に行うことができた。これらの団体及び2名の大口寄付者に10月30日の贈呈式の場を借りて感謝状を贈った。尚、今年度から、募金事務を簡素化するために、点字出版局の協力を得てパソコンによる事務整理を開始した。

寄宿舎の食堂。食事の前も歌を歌う。
ダランの盲学校にて。

ネパール　ちょっと辛口印象記

広島大学　五十嵐　信敬

ロマンを求める旅人ならば、ネパールという国から、雄大なヒマラヤ連峰を瞼に描き、牧歌的で素朴な民衆を想像し、現存する中世の街に夢をはせるかもしれない。しかし、我々調査団の訪れたネパールは、国力を支える天然資源も産業も工業技術も持たないために、外国の援助に頼らざるを得ない山間の小国であった。識字率28.9%（1985年）という数字が、ネパールの文化・教育の現実である。

そのネパールが、点字定規を作る技術さえ持たない状態で、視覚障害教育を推進しようとしている。無謀とも思える試みであるが、そこには、そのうちどこかの国が助けてくれるという期待が見え隠れしている。その期待に応えるのが我々外国人の役目である。

ネパールの視覚障害教育は統合教育方式である。統合教育と言っても、日本のように地域の学校に就学する方式とは違う。ある高等学校（10年制の学校）を統合教育校に指定し、そこに視覚障害児を就学させる方式である。したがって、自宅から通学できる子どもはほとんどいない。統合教育校にはBlind Section（盲教育部門）と呼ばれる寄宿舎を兼ねた資料室が設置され、点字や歩行等の特別指導や教材作製等の役割を担っている。

この方式では必然的に普通学級への視覚障害児の配属人数が多くなる。ところが、ネパールではそのことが問題とならない。何故か。これを解く鍵は教育技術の低さにあった。教師が口頭で説明し、生徒はそれを聞いて覚えたり、ノートに書いたりする単純な授業形態が採られている。教師はあまり板書もしない。これなら、視覚障害が支障にはならない。

しかし、ネパールにも近代的な教育技術が導入される日が来るであろう。その時、ネパールが推進しているこの統合教育方式が行き詰まることは必至である。さらに重複障害児が教育の対象となった時は、より根本的な検討を余儀なくされるであろう。機会をとらえて、この点をネパールの関係者に伝えたが、残念ながら、耳を貸してもらえなかった。

ところで、歴史は繰返すという。繰返して良い歴史と繰返してはいけない歴史がある。我々調査団は、繰返してはいけない歴史がネパールで繰返されている現実を見た。それは普通文字による教育が可能な弱視児への点字教育である。日本の昔の盲学校を見る思いであった。我々の持っていったルーペや単眼鏡を使って良く見えると喜ぶ弱視児達が、視機能の正しい把握とそれに応じた適切な教育方法の導入が急務であることを端的に示していた。

ネパールの視覚障害児教育は外国の援助なしには成り立たない。幸い、日本は世界に誇る教育技術を持っている。それだけに教材・教具等の物質的援助だけでなく、教育技術面からの援助もできる立場にある。これらの援助は速やかに現場の教師や子ども達に役立たなければならない。残念ながら、ネパールの指導者達に接して、彼らが必ずしも子ども達の利益のために最善を尽くすとは限らないという印象を受けた。援助する側に、援助の効果を厳しく追求する毅然とした態度が必要であることを痛感した調査の旅であった。

パントさんの思い出

六つ星山の会・一会員

私が彼と再会したのは10月に入ったばかりの或る夕暮れであった。帰途を急ぐ私の背後から声をかけられて振返った私の耳にあの「パントです」と云う人なつかしげな声が飛び込んで来た。

意外な場所での再会に驚いたり懐かしんだり、頃合いも恰好で早速一献汲み交わすことになった。

彼との初めての出合いは、私達のグループ「六ッ星山の会」で9月中旬に北八ヶ岳池めぐり山行の際で、赤岳に連なる標高2300メートル余の丸山の登山口であった。

参加メンバーの自己紹介があった時、彼が流暢な日本語で「パントです。ネパールから来ました。どうぞよろしく」とあいさつしたのが非常に印象的であった。

先の山の会の例会で彼とオーダーを組んで歩く様にとリーダーのM氏から指示を受けており、また拙ない私の英会話がお役に立てばとお引受けしたものの未知の外国人とペアーでの山行は興味もあり、また少からず不安でもあった。

然し、案ずるよりは生むが易く彼の第一印象はそんな危惧を根底から吹き飛ばして仕舞うほどに、さわやかであった。

世界の屋根ヒマラヤの山ふところに生れ育った彼から見れば日本の山は雪もなく低い筈である。でも彼は緑と稜線を美しいと讃嘆する。山高きが故に、であろうか。

この山行には、NHKラジオの盲人アワーのディレクターが密着取材。彼も帰国したらこの様なサークルを作って活動したいと答えていた。

さて、視力障害者をサポートしての山歩きは、彼の人生で始めての経験であり障害にもめげずひたすら山を歩く姿に頭の下がる思いであると云う。登山道は腰のあたりまで足を上げる程の段差や高低の上り下り。岩の突起や障害物、路肩の崩れ、右へ左へなどと指示してくれる。足場の位置も適確で歩き易く疲労度も低くなる。初めてと云うにしてはまことに堂に入ったものでさすがヒマラヤ育ちと感心する。

夜の山小屋は、彼を囲んで乾杯。ヒマラヤの話に花が咲き一同が夢をふくらませる。何時の日か、ヒマラヤへと。

誰かが私にそっと耳打ちしてくれる「パントさんの瞳はとても神秘的ヨ」晩秋のたゝづまいの中に私達にさわやかな思い出を残して帰って行った彼に再会する日が楽しみである。

ミスター・ナンバー・ファイブ

毎日新聞社・点字毎日編集部　編集委員　竹内 恒之

辛さを、十段階に分けたインドカレー店が東京ヘレン・ケラー協会の近くにある。その「五番」。何しろ辛い。まるで炎を飲み込んだ感じだ。なのに彼は、毎日、「ゴバン、クダサーイ」とやっていたそうだ。そんな彼を、私はひそかに〝ミスター・ナンバー・ファイブ〟と呼んだものだ。

だが、辛いもの好きのミスター・ナンバー・ファイブも、在日中に見せた福祉への考え方は、はっきりいってけっして辛いものではなかった。厳しくいえば、何から何までが人だのみ、日本だのみの感が強かった。しかしそれは、彼の人間性からだけのものではなく、われわれの認識、想像外にあの国の社会環境あるいは福祉実態があるが故だろうことが、日を追うごとにわかった。

大阪の(社福)日本ライトハウスにて。
中央はアジア眼科医療協力会のネパール人研修生。

レモンサワーのグラスを手に、点字教科書や教材のない子供の教育実情をつらそうに語ることもあった。光が見えぬ盲人の職業環境を悲しむこともあった。だが、研修が進み、点字製版技術が身につくにつれ、彼の表情は輝きを変えた。自信と喜びそのものを見せた。

すべてが取り残された国から、母国の期待を一身に負ってやって来た彼は、隣国の盲人福祉への対応のあり方についての辛さをわれわれに残し、日本を去った。日本の盲人福祉に注ぐべき力を、なぜネパールなどに、という声があるとも聞く。しかし彼のあの表情の輝きと、残していったあの辛さは、海外盲人援護事業の必要性を十分に裏付けたといっていいのではなかろうか。

パントさ

題字は「六つ星山の会・一
らず、補助具を用いて普通

「さよならは言いに
ですから、ナマス

パント

(社)日本ネパール協会理
国際ロータリー275地区青

日本ネパール協会の月例会で、東京
ン・ケラー協会の野崎氏にパント氏を紹
れたのは、昨年10月であったが、その後
友情を深める機会があった。

彼は小柄であるが、如何にも向学心に
た新婚早々の好青年であった。私に「ネ
ルに行ったことがありますか」と質問し
れた。第一声を母国訪問の有無で問いか
外国人に信頼を寄せることの多い私は、
があったら是非拙宅を訪れるよう話して
た。

早速、日曜日の午前中に来宅したい旨
があり、私の仕事の都合もよく新宿駅に
えた。車で厚木の七沢リハビリテーショ
センター（義父の見舞を兼ねて）を見学
箱根の大涌谷、芦ノ湖、元箱根を一回り
宿のセンタービルでお寿司の夕食の後分

再び来宅されたのは、娘の誕生会であ
小学五年の子供達に囲まれて、バースデ
ケーキを珍しそうに食べていた。渋谷の
供の城」で身障者施設「ねむの木学園」
覧会に感動し、街角の花屋の菊の懸崖に
れ、忠犬ハチ公の銅像をみて喜んでいた
レビの品定めの為、秋葉原の電気街をみ

集

んの思い出

の原稿から。中途失明にもかかわ
による原稿をお寄せいただきました。

です。

（1986年10月30日 贈呈式にて）

の思い出

産婦人科医
交換副委員長 田中 雅治

銀座のスエヒロでビフテキに舌づつみをうった。ヒンズー教の彼はネパールでは牛肉に手を付けないそうだが、臨機応変美味しそうに食べていた。

後日、点字印刷機贈呈式で、見事東京ヘレン・ケラー協会の期待に応えた研修成果がスライドで発表され、私共も花束でお祝いできてよかった。協会から頂いたテープは彼の懐かしい声とともに、心暖まる記念品として保存している。

私の所属する世田谷南ロータリー・クラブでもお話をして頂いた。日頃身障者に関心の深い会員に感銘を与えて頂いた。

東京ヘレン・ケラー協会の援助をとおして紹介されたパント氏は、我が家を訪問してくれる沢山の外国人の貴重な一人となってくれた。個人的仕事あるいはロータリーをとおして、多くのネパール人と接し、子供達が一人前になった近い将来に、ネパールで苦楽を共にしたい希望を持つ私であるが、アジアの多くの隣人が友好・親善で結ばれ、喜びを分かちあい、世界平和にささやかな灯をともし続けたいと思う。

Mr.パントと過した20日間

仲村点字器製作所 仲村 哲郎

八月中旬の残暑厳しい日中の盛り、私と東京ヘレン・ケラー協会の野崎氏は西武池袋線中村橋駅前派出所へと向いました。少々あきれ顔の野崎氏を横に、まもなく、制服警官の脇で困惑気な顔つきで佇んでいる一人の褐色の青年を見つけました。

私とMr.パントとの初対面です。

どうやら迷子の原因は、高田馬場で〝ナカムラ〟への道順を確認したところ親切な駅員さんが〝ナカムラバシ〟への行き方を教えてくれたそうで、いくら何でも〝ナカムラ〟はそんなに有名ではないよ、と後々まで笑い話として語り継ぐ程、今でも自然に微笑が溢いてくる懐しい思い出です。

そんな具合に研修初日がスタートしました。機械の構造、名称、保守方法、故障時の対処方法等、Mr.パントの研修プログラムは容易ではありません。

10日程後、我々もパント氏の歓迎会をしようという事になり、身内の者なども集って、ささやかですがMr.パントを囲み飲んだり食べたりの一晩がありました。飲むにつれ時間がたつにつれ、Mr.パントはなかなか上機嫌で、ネパールでの話をしたり、毎朝しているというヨガのポーズをしてみたり、又、私の息子はハネムーンベビーだよと教えると、〝彼はMADE IN HAWAIIだ〟などと言いながらはしゃいでいたことも、彼の愉快な人柄のひとつとして覚えています。

そんな風に楽しい日々も交えながらの研修も、勉強熱心(？)なMr.パントと、全面協力して下さった野崎氏のおかげで、予定より一週間程早く終了する事が出来ました。

聞くところによると、機械・機材等も無事ネパールに到着したとの事、Mr.パントの今後益々の活躍を期待しています。

Good Luck Mr.PANT!

製版練習。仲村点字器で組み立てた製版

友情の橋をかけたパントさん

東京ヘレン・ケラー協会『点字ジャーナル』編集長 高橋 秀治

ネパール盲人への具体的な援助第一弾として点字出版所設置が決まり、早速、ネパールから研修生のパントさんがやって来た。点字製版スタッフは、息が長い仕事だけに、きちんと教えられるかどうか気を揉んでいたが、そんな心配をよそに、小柄で健康的な赤銅色の肌を持つ彼は、人なつこい笑顔をたやさず、英語点字の習得に励んだ。短期間の研修で、機械の操作や点字方法をこなすのは、少しきつかったようだ。指導に当った点字図書館の千葉一郎先生を手古摺らせたりもしたが、ほぼ所期の目的を達した。

自分で打った英点字の校正。指導は当協会点字図書館職員の千葉一郎氏。

のびやかなネパールと慌ただしい東京では生活スタイルが違うので、恐らくパントさんには相当なカルチャー・ショックがあった筈だ。しかし、ソ連やインドでの留学経験を持つ国際人らしく、英語と覚えたての日本語をあやつって積極的に周辺の生活にとけこみ、十分な対応振りを見せた。研修の合い間には、盲人関係施設を訪ねたほか、職員の家庭に呼ばれて日本料理や酒を楽しみながら、ネパール人の大らかさ、明るさを印象づけていた。

彼の帰国後、職員の間には一種のブームがおこり、それは今、〝これからネパール盲人福祉へのお手伝いを通じて、長いお付き合いがはじまる〟という意識で定着しつつある。

パントさんは、ネパールと日本に友情の橋を架けることに成功し、その交流はいよいよこれから本番を迎える。

ホームシックにかかった通訳君

東京ヘレン・ケラー協会　録音課長
佐々木　秀明

高熱・ゲップ、下痢――三重苦に喘ぐ同行のN氏を残し、私はネパールの極西・インド国境沿いのダンガリーへ向った。ネパール語はおろか英語もおぼつかない私の案内役は、ネパール盲人福祉協会のマドハブ氏とわれらが日本語通訳君サテンドラである。私がとくに興味をもったのはこのMr.サテンドラであった。彼はインド系で彫り深く褐色の肌、鼻の下にひげをたくわえ、上下対のジーンズ姿でなかなかのモダニスト。23才の美丈夫の本業は薬屋である。

が、精悍な風貌に似合わず、彼、ダンガリー到着の翌日にホームシックに陥ってしまった。実は帰りの航空券をとってない。拍車をかけるが如く、偶然出会った清水建設の某氏がこの地の現況をこまごまと教えてくれたから大変。いわく、バスが山賊に襲われた！やれ飛行機の切符もアテにはならぬ等々。しかし、あながち無視できぬ教えではある。ネパールの文化は東高西低。ここダンガリーはインドと境を接するまったくのイナカである。しかも同じネパールとはいえサテンドラにとっては初めての地だ。すっかり蒼くなってしまった彼、「いつ帰れますか？」と気もそぞろ。そこへ舞い込んだのが幸か不幸かたった1枚のキャンセルチケット。3人の血みどろの闘い？はなかった。入手の知らせを聞いた時のサテンドラのグリグリ目の輝きを、私とマドハブは見てしまったのだから。

さて、愛すべき彼の通訳の力量だが、ややピント外れとはいえ憎めないものがある。例えば、私が「その子は6年生だね」と確認すると、「そうです」。「ん、待てよ、6才かな？」と迷いつつ問うても「えーと、ね、そうです」。この「ね」がまたくせものである。で、これがたまに「な」になるのである。思うに彼の通った日本語学校では親しみのニュアンスで「――がね」と教えてくれたのだろう。それにしても彼が言うと愛敬とふてぶてしさが見事に同居する。彼は私の帰国の際も親しみを込めて言ってくれた。「Mr.ササキ、手紙、な」。

民話の中の盲人と街角の盲人

海外盲人援護事業事務局
野崎　泰志

ネパールの民話に次のような盲人が登場する。

「あるところに、盲目の老人がいた。老人には財産も息子や娘もなく、杖をたよりに門から門へ物乞いをしてくらしていた。あるとき老人は、こんなつらいくらしがつくづくうとましくなった。そして、世間の厄介ものになって蔑まれながら生きのびるよりも死んだ方がましだと思い、自殺しようと心に決めて森へ向かった。歩き続けて、ものすごい森に着いたとき、ふと、こんな考えが心に浮かんだ。『創造の神がわれわれを生み出して下さったのなら、この苦海から救っても下さるはずだ、なんで自殺などして良いものだろうか。それは罪だ。それより、マハデワの行をした方が良い』そこで老人は、マハデワを礼拝しながらくらし始めた。（後略）」

（三枝礼子訳、日本ネパール協会会報1985年8月号より）

物語は、その後この老人が神への願い事をうまく考え、チャンスをつかんで開眼し幸福になったという教訓説話である。

どこの民話でもよくあるように、ここでも現世利益が強調されている。しかし盲人がこのような例えの中に登場する事の背後に、逆に彼らの現実を伺う事ができる。例えば障害になった妻は離婚されても当然という風潮がネパールにはあると聞く。ぎりぎりの活らしをしている中で、家族の中心となる主婦が労働力を失うことは、家族の死活問題に発展する。農村部の女性は日に11時間働き、平均寿命も男性より短く、視覚障害の女性は男性より15.6%多い。手当が男性の場合よりも遅れるからである。現世利益を現実問題と考えると、この民話を別の角度から読み替える事ができそうである。

私達はカトマンズの街角で物乞いをする幾人もの盲人に会った。同行のS氏と私は、群がって来る人々の好奇と非難の視線を感じながら、ビデオを回しシャッターを切った。悲惨さばかりを強調してはいけないとよく言われるのも、どこか頭の中にあり気持は重かった。その後何日もの間、私達はその日の事を話さなかったように思う。或る日、日本へ連絡手紙を出す時、S氏はその日の事に触れ「悲しいです」と一言記していた。あの実感はこの言葉以外にないと思った。

ネパール点字印刷所開設記念

オリジナル
テレフォンカード

あなたのランプの灯を
いま少し高くかかげて下さい。
体の不自由な人々の
行く手を照らすために……
ヘレン・ケラー

領価　1,000円
ご希望の方は事務局までお申し込み下さい。

（ヘレン・ケラー女史のポートレートをあしらったオリジナル封筒入り。）

農村の障害児たち

調査団は学校から村へ入り、盲児の親達にも直接会った。左から2番目の姉は、先天性ろう唖、その上最近トラコーマで失明した。もちろん受けいれてくれる学校はない。弟の盲児は今はダンガリの学校の寄宿舎へ入っている。

（ダンガリ郊外の農村にて）

HELEN KELLER NEWS

点字印刷機材 やっとカトマンズに到着

昨年の12月5日に横浜港を船出して同29日にはインドのカルカッタに着いていた、点字印刷機材約3.5トンが、この6月22日にようやくカトマンズに着きました。予定では、1月中旬でしたから5ヵ月の遅れです。遅れの原因は色々ですが、事情通によれば半年かかるのは当たり前だそうで、要するにインドとネパールの国際間の問題のようです。一日も早く印刷所が稼働できるようネパール側の努力に期待したい所です。

畠博之先生を訪ねて

ネパール教育協力会との現地交流

ゴルカ地方の山間部で、ボランティアとして初等教育に当られている畠先生を訪ねました。先生はネパール教育協力会の派遣教師で、この2月にネパールへ赴任したばかり、これから2年間草の根レベルでの協力に献身されます。

先生は、元大阪府立盲学校の理数科の教諭。私達の目的は、4月に予定されていた盲教育セミナーに、日本側のメンバーの一人として参加して頂くことにありました。

盲人協会のジープを運転手付きで借り、先発隊の2名と、いつもお世話になるネパール在住の看護婦さん山根正子さんとで、道も良く分からないまま村の名前だけを頼りに出発しました。車での行き止まりパルンタールに着いた時は既に夕暮れ。一泊の後、翌朝早く歩き始めて2時間、ようやく日本の鯉のぼりが朝日に翻る山の上の学校、サラソワティ小学校へ到着。明るい子供たちの歓迎を受けました。畠先生には今後もネパールの盲児教育に協力して頂く事になっています。

L.N.プラサド会長 岩橋武夫賞受賞

ネパール盲人福祉協会の会長、プラサド博士が1987年度の岩橋武夫賞を受賞されました。この賞は、日本ライトハウスの創設者、故岩橋武夫氏の功績を永く後世に伝える為に、1975年に設けられたものです。同賞規約によれば、「毎年、盲人教育・訓練・リハビリテーション・プレイスメント・福祉事業運営・失明防止、その他盲人福祉に関するあらゆる分野で、その功績が特に優れていた者を選び、賞状ならびに賞金を贈ることを目的とする」とあり、対象地域はアジア西太平洋となっています。ネパールからは初めての受賞です。

これまでは、台湾、マレーシア、インド、香港、フィリピン、パキスタン、シンガポール、韓国、日本から選ばれています。日本からは、岩橋英行氏(前日本ライトハウス理事長)と共に、アジア眼科医療協力会の黒住格先生が受賞されています。

ネパールではプラサド博士の受賞は大変喜ばれ、ラジオ・テレビ・新聞で大々的に報道されました。日本では盲人関係者の間で知られているだけですが、アジアの人々の間では大変名誉あることとして知られています。(2月にネパールから来た手紙では、「Tokyo Iwahashi Prize」と書いてあって、最初は何のことかと首をかしげましたが、タケオをトーキョーと聞き違えたようです。)

今回の3月から4月にかけての訪問では、プラサド氏以下協会の皆さんの熱心な協力で、初期の目的を果しました。プラサド氏の活力あふれる指導力は目を見張るものがありました。

毎日新聞4月14日付けの「ひと」の欄で、プラサド氏の受賞が紹介されましたが、浩宮殿下のネパール訪問に同行した記者が現地で取材したもので、タイミングの良い報道でした。

昭和61年度会計報告

自　昭和61年4月1日
至　昭和62年3月31日

収入の部

項目	金額
協賛金収入	1,943,800
助成金収入	4,700,000
募金収入	2,209,931
特別会計繰入金収入	152,990
雑収入	165,164
預り金	876
繰越金	5,591,888
合計	14,764,649

支出の部

項目		金額
事務費	旅費	190,290
	一般物品費	76,030
	印刷費	351,250
	会議費	17,390
	役務費	348,926
	借料損料	145,532
	雑費	344,000
	預り金支出	6,063
人件費	アルバイト料	658,988
	職員給与	2,900,638
	法定福利費	341,696
事業費	海外出張費	276,435
	海外援護費	6,049,866
次年度繰越金		3,057,545
合計		14,764,649

助成金の内訳

全国老人クラブ　：　1,000,000円
自動車労連　：　1,900,000円
富士記念財団　：　1,800,000円

トヨタ財団からの研究助成

この他に、研究助成2,900,000円を財団法人トヨタ財団より受け、「ネパールに於ける視覚障害児教育の方法論に関する実践的研究」を行った。

寄付者ご芳名

（順不同・敬称略）　自　昭和61年4月1日　至　昭和62年3月31日

〈北海道〉
飯島英
〈宮山県〉
大貫留男
谷内正史
〈新潟県〉
岩下光男
片桐武昭
間瀬桂吉
〈宮城県〉
佐藤喜市
〈茨城県〉
百瀬晧
井上孝雄
古屋野正伍
青木陸輔
小泉周二
〈群馬県〉
渡辺直明
群馬県立盲学校生徒会
〈埼玉県〉
国立リハビリテーションセンター学友会
佐古井貞行
大谷宗太
奥野茂
但木台市
秋山恭子
秋山倶子
坂本明弘
伊藤ゆき
上杉妙子
小林一弘
有本昌
江原美
服部幸
設楽知
〈千葉県〉
小川元
三宅正太郎
吉永英
恵下湧
山口節子
〈東京都〉
田村和凡
奥山善一
往古豊
井口
藤森岳
黒崎
吉良秀
櫻井文
加藤敞一郎
橋本正
矢作秀雄
向後紀代
辻井達
藤江幾太郎
松下晴
山本美穂子
三枝礼子
山口一孝
千葉重美
西澤憲一郎
砂賀忠彦
久仁滋
野崎泰志
和田文子
更生施設本木寮有志
山下武夫
菅原温子
柳家小さん
林大
谷池敬子
端山智弘
中川幽芳
長島達也
日本新聞インキ
末吉恵里
杉山嘉信
田中亮治
富士梱包紙器
三遊亭小遊三
東加代子
阿久津章治
若林弘子
塩屋賢一
大本印刷
大芦さや か
汲田冬峯
森本哲郎
南博
片岡義男
金田正一
塩月弥栄子
石井桃子
津上忠
出光永
イクバル・ハニフ
イクバル・明子
保坂昇
村山知子
村山敏行
田中雅治
加藤章声
宇野幸子
加東康一
湯川れい子
半田敬史郎
佐藤ひろ子
今井通子
向井潤吉
毛利玲美千声
武蔵野女子学院
中学高等学校生徒会
〈神奈川県〉
田中寿
藤井誠司
木下益人
坂入操
小林愛子
飯田壮
安田啓子
加治甚吾
松尾宏之
坪川靖彦
南林知
佐藤祐子
藤林成生
小川喜道
〈山梨県〉
林鳳紘声
〈静岡県〉
中村歌子
野呂郁子
渡辺瑛声
〈愛知県〉
内山武志
加藤晃
神崎博
木下信行
神谷貞
折戸正明
(株)尾上機械
〈京都府〉
藪内清
渋谷有教
田伏淳一郎
北風政子
大橋東洋彦
高坂正堯
〈大阪府〉
大阪府立盲学校職員有志
肥塚美和子
中山弘子
石川保司
阿曽寿
松野良吉
宮原満洲男
富鹿克彦
北浦喜久子
石川昌宏
〈奈良県〉
奈良県立盲学校
米田昌徳
〈兵庫県〉
(株)関西電気
森典子
増田守男
小河静
浅田幸
近藤文郷
〈高知県〉
秦泉寺明
〈愛媛県〉
青木正樹
〈香川県〉
高松キワニスクラブ
前沢絢子
〈鳥取県〉
門脇好登
加藤威
〈広島県〉
桝幸雄
石井融三
〈福岡県〉
福岡県立盲学校
内村道子
〈宮崎県〉
中竹茂
〈鹿児島県〉
神崎武子

協賛者ご芳名（順不同・敬称略）

自　昭和61年4月1日
至　昭和62年3月31日

〈北海道〉
江差信用金庫
工藤　万砂美
空知信用金庫
東日本学園大学
文化女子大室蘭短期大学
北海道拓殖銀行
北海道薬科大学
〈青森県〉
青森明の星短期大学
宮森　正昭
青森米穀卸(株)
桜田病院
〈岩手県〉
ペンションいーはとーぶ
吉田　功
(株)昆米穀店
〈宮城県〉
東北高校
宮城マツダ販売
泉市役所
気仙沼スーパーマーケット
鶴見屋商店
東北工業大学
東北電力(株)
〈山形県〉
主婦の店鶴岡店
〈秋田県〉
大平工業(株)
(株)マルシメ
大滝運輸
〈福島県〉
福岡工業大学
後藤　二雄
いわき市
北会津村
天栄村役場
宇津峠カントリークラブ
(株)サンヘルス
〈茨城県〉
結城病院
真壁町役場
筑波町役場
(社)茨城県建設協会
福祉センターやたべ
開彰商事(株)
(株)高豊
常総開発工業(株)
桜村農業協同組合
井坂　啓
石津建材(株)
伊勢甚
茨城倉庫
茨城県食料販売協同組合
茨城ヤナセ(株)
北関東道路安全(株)
白菊酒造
鈴木　実
住井　すゑ
誠之会病院
第一スーパー
〈栃木県〉
宮下眼科医院
第一電子工業(株)真岡工場
(株)大黒屋
飯野学園さかえ幼稚園
作新学院
白沢電気
鈴木歯科医院
栃木商工会議所
(株)那須ゴルフ・クラブ
檜山食品工業(株)
〈群馬県〉
春山建設(株)
(株)群馬電子計算センター
(株)ソフィア
マックス(株)
〈埼玉県〉
(株)日高カントリー倶楽部
マツモト電器(株)
(株)マルヤ
東京オイレスメタル工業㈱
大東ガス(株)
小川工業(株)
女子聖学院短大
セイキ工業
武蔵学院戸田教室
立正校成会埼玉布教区
〈千葉県〉
(株)千葉日産サニー
椿　貞一
トヨタカローラ千葉(株)
我孫子市役所
石島胃腸病院
市川瓦斯
江尻　隆
(有)岡田不動産
柏南病院
京葉重機工業
光葉企業
サツマ興業
セントラルプラザ奈良屋
東洋エンジニアリング
習志野鉄工団地協同組合
ボーソー油脂(株)
森永エンゼルカントリークラブ
渡辺建設
〈東京都〉
光文書院
サッポロビール
三洋証券
システムエイジ(株)
資生堂労組
清水　徹
(株)社会調査研究所
昭和女子大学中高部
順心女子学園
杉田製線工業
住友スリーエム
正則学園高校
専修大学付属高校
セントラルスポーツ(株)
全国理容環境衛生同業組合連合会
相互ビルディング
総合警備保障
ソフトウエアコントロール
ソントン食品
太知商事
台糖ファイザー
太平洋証券
大鵬薬品工業
武田製作所
(株)武富士
多摩ヤクルト販売(株)
第一企画
第一相互銀行
大東カカオ(株)
大和証券従組
中外製薬
千代田火災海上保険
(株)テーオーシー
寺内　大吉
電源開発
東映動画(株)
東京スクールオブビジネス
東京都競輪事業組合
東京ビジネスカレッジ
東京専売病院
東芝労組府中支部
東芝ＥＭＩ(株)
東邦生命保険
東洋水産(株)
東和証券
ときわ堂薬局
(株)豊島園
トット基金
動力炉核燃料労組
中田鉛業
中元　信武
並河　髙里
日清製粉
日東製粉
日本ロシュ(株)
日本三曲協会
日本アイビーエム
日本化工機工業
日本鋼業角丸証券
日本興業(株)
日本債券信用銀行
日本証券金融(株)
日本ゼオン(株)
日本ユニバック
野沢米穀店
野村証券
(株)服部セイコー
早川ダット工場
原電子測器
パイオニア労組
日野自動車羽村工場
深沢　信夫
富士ゼロックス
日動火災海上保険
(株)サウンドクラフト
(株)教育総合研究所
㈱しんきんクレジットサービス
ノボ薬品(株)
西岡酒造(株)
(株)マルシンフーズ
マリンフーズ(株)
商業労連
(株)インタークレスト
ポッシェ(株)
オーク(株)
日本オフィスシステム㈱
(株)小林コーセー
伊勢丹労組
イトーヨーカドー労組
田中商事(株)
(宗)妙智会教団
日本学園高等学校
自交労連
花蔵院
データイースト(株)
(株)ホリ企画
(財)日本遺族会九段会館
森下産業(株)
(株)田中宝飾
田辺誓約(株)東京支店
(株)ジェーシービー
駿台学園高等学校
野村　正幸
八千代信用金庫
(宗)妙密寺
(株)阪急百貨店
大成証券(株)
日本舗道(株)
㈱新宿ステーションビル
ナショナル証券(株)
江州建設(株)
ホウライ乳業(株)
阿含宗東京本部
秋枝病院
浅草信用金庫
アサヒ交通
麻布教育センター
(株)アスキー
有賀　信勇
アルファ電子
いすず自動車
伊藤忠燃料
今井　通子
植田　まさし
上野食品
エステー化学
王子製紙
大川電気
小原流本部
オリエンタル写真商事㈱
海外経済協力基金
花王(株)
柏木　俊彦
兼松セミコンダクター
カルビー
カルピス労組
関東第一高校
関東開発(株)
(株)紀文
教育同人社
クラヤ薬品
(株)グラフィカ
京急開発
見城　美枝子
神津システム設計
里中　満智子
米倉斉加年
専修大学入試事務係
聖愛病院
深沢　隆之
常盤興産(株)
調布東山病院
フコク生命研修センター
㈱第一ラジオアイソトープ研究所
野津資物食品(株)
カルピス食品工業(株)
(株)杉原製作所
(株)寄林舎
安見クリニック
昭栄化工(株)
インターナショナル
東京都六市競艇事業組合
立川ブラインド工業(株)
(株)天塩
造船重機労連
関東電気工事労組
三越百貨店労組
古沢電機(株)
(株)文祥堂
プラザトキワ
町田蛍友会進学教室
松井証券(株)
丸見屋食品工業
三菱電気労組
武蔵野女子学院
村田建設
明光学園
明星学苑
(株)山田洋行
山田　森一
ヤマト商会
㈲山本看護婦家政婦紹介所
(株)ユカ
豊商事
ユナイテッドスチール
ユニオンソース
横山　光輝
蓋沢証券
レリアン(株)
ロッテ労組
渡辺紙工業(株)
渡辺酒造
〈神奈川県〉
片山整形外科記念病院
厚木商工会議所
(株)相模工務店
(株)東海金属
甲子羽電機(株)
横浜高島屋労組
(株)測機舎
小林医院
中丸　荘一郎
藤沢さいか屋
上明戸歯科医院
味の素川崎工場
伊豆箱根鉄道
磯子ミリオンボウル
(株)上野運輸商会
英数研究所
エバラ食品工業
岡本工作機械
小田原潟本カントリークラブ
神奈川相互銀行
川崎大師平間寺
関東自動車工業労組
㈱コヤマドライビングスクール湘島
作加藤商店
産業能率大学
湘南カントリークラブ
自治労神奈川県本部
千代田計装
内藤電誠工業
奈良林祥
日栄運輸倉庫
泰野回収センター
ハニーミルク
平塚競輪主催者協議会
富士スーパー
富士通労組川崎支部
富士フィルム労組
(株)丸う田代商店
ミナトエレクトロニクス㈱
大和製缶労組
渕河原カントリークラブ
横浜女子商業学園高校
横浜共立学園
寄自動車整備工場
〈山梨県〉
上野原信用組合
(株)シチズン電子
昭和町役場
日新工機山梨工場
ヤマビ液化ガス
〈長野県〉
(株)第一スーパー
アールエーシステム
おでんち山荘
サニーカントリークラブ
滋賀高原観光開発(株)
信濃空圧工業
日精工エスピー機械(株)
松本歯科大学
〈新潟県〉
豊栄市社会福祉協議会
長谷川病院
山津水産(株)
伊藤製作所
スズキ新潟販売(株)
新潟いすずモーター
日佑電子
日本マネージメントアカデミー
新潟日産自動車(株)
中野建設工業(株)
㈱新潟ダイハツモータース
〈富山県〉
新湊市
大川寺病院
カネボウ化粧品富山販売
笹島工業
(株)四方組
トナミ運輸
(株)若林商店
〈石川県〉
(学)金城学園
粟津農協
小松エンジニアリング
小松ウオール工業
十全会
竹田土建(株)
(株)つじはる商店
北菱電興(株)
北陸日本電気ソフトウエア㈱
宮地組
(株)メツツ
〈福井県〉
福井女子高校
清水町役場
勝山生コンクリート
〈岐阜県〉
奥濃飛白山観光(株)
岐阜瓦斯(株)
岐阜経済大学
(株)吉川組
〈静岡県〉
天神屋
(株)東海
日本大学三島高校
八洲水産
ヤマハ発動機
信栄製紙(株)
清水市福祉課
松江山敬覚寺
静岡トヨペット(株)
(株)御殿場製作所
沼津学園高校生徒会
(株)うなぎパイ本舗
伊東パークゴルフ場
アスモ(株)
伊東カントリークラブ
敬天堂歯科医院
小松川ガス
静岡英和女学院
下田ガス
新南駿病院
(株)鈴木組
瀬尾整形外科病院
〈愛知県〉
中京大学
〈京都府〉
大倉酒造(株)
京都西高等学校
神慈秀明会
(株)互助センター
龍神総宮社

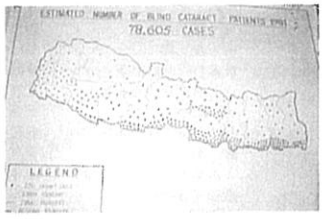
〈大阪府〉
大倉建設(株)
(株)オカハシ
参天製薬
三洋電機
ダイセル化学工業
浜田印刷機
ミノルタカメラ
〈兵庫県〉
神戸市民生局
㈱コンフェクショナリコトブキ
西宮酒造
(株)ノーリツ
〈愛媛県〉
聖カタリナ女子高校
山中　順雅
〈長崎県〉
九州ガス

その他に次の方々のご協力をいただきました。記して感謝いたします。

募金箱：㈱飯田百貨店、渡辺石油、ライン・ゴールド高田馬場店、
ヘレン・ケラー学院売店、庄屋国分寺店、ダイハツ、
喫茶香磁、日本ネパール協会第21回ネパール・ロビー、
イラスト：是　千恵子　**テレフォンカードデザイン**：香川 尚子
取材用8ミリビデオ：(社福)日本盲人職能開発センター

ネパールの失明原因別盲人の分布

トラコーマによる盲人の分布
(斜線③の地域に全トラコーマ患者の90%が居住する。)



白内障による盲人の分布
(●印一つが250人)

白内障による失明は、東部のタライ平野部に多く、トラコーマによる失明は西側地方に多い。西の乾燥、東部タライの湿潤と云う気候と共に人口密度がこれらの分布の背景となっている。　(カトマンズ・アイ・ホスピタルの資料より)

寄付金に対する減免税措置

東京ヘレン・ケラー協会は、所得税法施行令第215条第4項および、法人税法施行令第77条第4項にかかげる社会福祉法人でありますので、所得税法第78条第2項第3号および、法人税法第37条第3項の規定が適用され、当協会に対する寄付金は次の通り、寄付金控除または損金算入について税法上の特典が受けられます。

1．個人の方が寄付をする場合は、
寄付金控除額＝(寄付金額と年間所得の25%のどちらか低い方)－1万円

2．法人が寄付する場合は、
一般寄付の場合の損金算入限度額の2倍まで、損金算入枠が拡大されます。

編　集　後　記

特集を組んでみて改めて思い返しました。Mr.パントはほんとに色んな方々にお世話になったのでした。紙面の都合で原稿をお願いできなかった多くの方々にも、この場を借りてお礼申し上げます。この春会った時も元気にやっていました。

統合教育調査から4月9日帰国、5月・6月はその整理と報告に追われて、やっと「愛の光通信No.2」の発行にこぎつけました。いつもながら遅くなりまして申しわけありません。

今年度からの事業計画は、調査結果に従って、弱視教育の推進・職業教育開発等となっています。民間協力の悩みはいつも財源です。皆様の一層のご協力をお願いします。(事務局)

発行：社団法人 福祉法人 東京ヘレン・ケラー協会
海外盲人援護事業事務局

TOKYO
HELEN KELLER
ASSOCIATION

住所：〒160 東京都新宿区大久保3－14－4
毎日新聞社早稲田別館内
TEL (03) 200－1310
郵便振替　東京5－91688
銀行口座　三井銀行 新宿支店 普通預金 5101190